

痛恨の極み

竹村 吉右衛門

昭和十五年、私が安田銀行（現富士銀行）の小舟町支店長になって赴任した時、三木証券の鈴木社長さんが訪ねてこられ、「秋田県立大館中学（現大館鳳鳴高校）出身のあなたの後輩、三浦正が私の養子になっている」と初対面の私に挨拶された。この鈴木社長さんはしょっちゅう店に見えておられたが、いつも和服で羽織袴で威儀を正しておられたのが印象的であつた。昭和三十五年十二月二十七日、鈴木社長さんが亡くなられ、団子坂のお邸に弔問したところ、玄關に大平さんが立つておつたので、「あなたはどうしてここに」と聞いたところ、「女房の父」といわれ、愚問であつた極り悪さは未だに忘れられない。

終戦後追放になつた私は、銀座裏の一室を借りて安田の追放浪人の集会所を設けた。そこに集まつたなかに高木陸郎翁もおつた。ある日、高木翁から池田通産大臣が『麦飯放言』や『中小企業失言』で失脚したが、吉田総理から、淋しそうだから励ましてやってくれと頼まれたので、柳橋の料亭に君も顔出してくれといわれた。そこで、池田さんを主賓に高木翁、遠藤柳作、三村起一の三長老と私が同席した。池田さんは『お流れ頂戴』といったら、低姿勢じゃないかとひやかされておつた。この集まりはたまたまその日が十八日であつたので、『末広会』と名付けられた。正式に米田中を会場と定めて第一回の会合を催したのは昭和三十二年二月十八日で、その日の出席者名簿には来賓・池田勇人、大平正芳の署名がある。池田内閣発足十日後の昭和三十五年七月二十八日の夕、末広会の面々は米田中の広間で新総理と官房長官を迎えた。まず池田さんから総理大臣になつた挨拶があつたが、

その時、「今日から私は大衆政治家になったので、芸者の侍る席には出ません。またゴルフも止めることにしました」と宣言された。次いで大平官房長官は、「池田新総理は頑固な方で、なかなか私の意見など取り上げてもえなかつたが、認証式が終つた瞬間に、今日からは君のいうことは何でも聞くとおっしゃいましたので、皆さんどうが証人になつて下さい」と挨拶されたのである。これは『私の履歴書』にも出ている。

池田内閣の頃から、しきりにマスコミは『大平・田中ライン』なるものを喧伝するので、千々波敬太郎君と一緒に、昭和四十一年十月二十五日の夕、四谷の福田家にお二方を招いて聞いたことがある。その時、田中角栄さんは、「あるかどころではありません。二人は義兄弟の契りを結んでいるんです。大平先生は、発言はもたもたしているように見えるが、それは頭の中で文章を練っているからで、その証拠に速記録を読むと、あとさき立派な文章になっている。いやしくも一國の総理大臣とはこうした人でなければなるまい。大平内閣ができた暁には、私は如何なる犬馬の勞も惜しみません」と大きな声で断言されたものである。

ひと一倍多忙の大平さんへの進言は、いつも便箋一枚半に一筆啓上と書いて速達することにしておつた。『大福』時代にも、『大平内閣誕生』の際も、『五十四年十月七日の選挙』直後にも。そして最後は、昨年五月三十一日朝七時のテレビ放送直後に、「只今、総理には過勞の為に虎の門病院にご入院の報に驚きました。嘗てホテルオークラで、如水会の総理就任祝賀会の席上で、私は『男性として日本一多忙な方故、その御主人から百点満点を頂いている令夫人に総理の健康管理を呉々もよろしく頼む』と万歳の音頭を前にして挨拶したことを想起し、改めて此際、何を差し措いても御健康の完全な回復に専念され度、そのためには一切『面会謝絶』が何より肝心、嚴重に励行され度、選挙は小生の見るところ、心配無用、安心して静養させて下され度」と志げ子夫人宛に速達した。しかし、四囲の事情がそれを許さなかつたらしい。断腸の思いである。

(安田生命相談役)